

深代惇郎エッセイ集



深代惇郎（ふかしろ じゅんろう）

1929年東京生まれ。1953年東大法学部卒業。
同年朝日新聞入社。横浜支局員，東京本社社
会部員，ロンドン・ニューヨーク各特派員，
東京本社社会部次長などを経て，1968年論説
委員，1971年ヨーロッパ総局長，1973年1月
論説委員，同年2月から1975年11月1日，入
院するまで「天声人語」を執筆し，同年12月
17日，急性骨髄性白血病のため死去。
著書『深代惇郎の天声人語』『続 深代惇郎の
天声人語』『深代惇郎の青春日記』（朝日新聞
社刊）。

深代惇郎エッセイ集

朝日文庫

1981年5月20日 第1刷発行

1989年7月20日 第7刷発行

著 者 深代惇郎

発行者 八尋舜右

印刷製本 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(545)0131（代表）

編集—図書編集室 販売—出版販売部

振替 東京0-1730

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

深代惇郎エッセイ集

深代惇郎

朝日文庫

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

表紙・扉 伊藤 鑛治

目次

倫敦暮色

ぱーどん　ぱーどん　ぱーそなりてい15　いんぐりっ
しゅ21　これすぽんでんと28　ばっきんがむ34　こみ
ゆにてい40　あーゆー・ろんりい46　あんち・もだん52

座　　標

理想と現実61　国際化64　言論の自由68　政治家と金
72　歴史好き75　政治モラル79　政治の演技者82
ボルノ論議86　「小国」の外交89

特派員メモ

時間97　身上相談98　武者修行99　女王夫妻101　ヨ
ーロッパ102　記者魂103　帝国主義104　停電106　予算
日107　テムズ108　人間と国民109　役所111　本112
星条旗113

ぷりずむ

さまよえる おとなたち 117

政治的でない教育はない 119

恨むより恨まれたい？ 122

高密度社会に生きる 125 少数

派のチャレンジに答える 127

知らないことの利点 130 L

OVEとLIKEについて 133

「日本人論」を好む日本人 135

「が」と「は」について 137

息子の死 140 書かれなかった文

142 道徳アレギー 145

学歴という免罪符 147 「完全

主義」をなぜ好む？ 149

世界名作の旅

『怒りのぶどう』 155

『風と共に去りぬ』 165 『最後の一片』

174 『アメリカの悲劇』 184

『フランクリン自伝』 194

『バスカヴィル家の犬』 203

『海へ騎りゆく人々』 212 『チ

ボー家の人びと』 221

『人形の家』 236 『チップス先生 さ

ようなら』 244

あとがき 253

深代惇郎エッセイ集

倫敦暮色

『朝日ジャーナル』連載の特派員エッセイ

ぱーどん ぱーどん

イギリスには、中国、ベトナム、アメリカと違って、さすれば血の吹き出るような話題が欠けている。晩秋のロンドンのようなものだ。落ち葉にかかる日差しは、弱々しくて、やわらかい。筆の方もおのずと、のんびりと生ぬるくなるのを、あらかじめご容赦願いたい。

二回のロンドン生活を通算すると、三年半住んだことになる。先日、知り合いの若いイギリス人記者に「イギリスは好きですか」と聞かれて、「落日の美しさが格別に好きです」と答えたことがあった。ロンドンには夕暮れがよく似合う町だ、というのが私の実感だ。レンガや石も、赤バスも黒いタクシーも、まぶしい太陽にさらされると、恥ずかしげで、体のもっていきようがないといった風情をみせる。ところが日が落ちるにつれて、微妙なかげりをたたえ始め、息をのむほどの美しさをみせるひとときがある。

そんな感想を述べながら「この国の日没は美しい」と、もう一度繰り返したら、相手は真剣にまじまじと私を見つめていた。それから「あなたのいう意味はよくわかります。戦争に勝ったことが、かえってわれわれをだめにしたのかもしれない」と、ぽつんといった。少し悲しげな表情にみえた。

私が話したのは日没の話ではなく、実はイギリスのことなのだ、と彼は感じとってくれたのだろう。下世話に言えば、ツンとすまして気位の高い女が、ふと涙をみせるような、そんな魅力がこの国の人たちにはある。

負けずぎらいの国民性

もっともこうした話は、相手といささかの気心が通じた後でなければいけない。ロンドンに来て初めのころは、感想を求められると「正直は最良の政策」とばかりイギリス批判をすばずばやって、座を白けさせてしまった経験がある。だれでも、のっけから自分の国の悪口をいわれて愉快なはずはないが、イギリス人はどの国民にも劣らず愛国心が強く、負けずぎらいで、強情だと思ふ。他国の人に悪くいわれると、あの冷静な紳士たちも気色ばんで反論したりする。イギリスの新聞がイギリス人をしかっているのを読んだからといって、安心して悪のりしてはいけない。外国人が同じことをしゃべっても、とても受け入れられそうにない。自分の女房の悪口ばかりいう人に、合槌を打ちすぎて失敗するようなものだ。イギリスのユーモアとよくいわれるが、あれはいささかの自虐趣味をまじえながら、自分たちが自分たちをひやかしたり、笑ったりしているからであって、他国人にさきにいわれたらユーモアにならないところがある。

そのへんがアメリカ人と少し違う。アメリカ人も愛国的な国民だが、自分たちを批判する相手の率直さもまた評価するという長所がある。ムキになって弁護することに変わらないが、それで

も相手に対する感情には案外カラリとした、こだわりのなさが感じられることが、私の経験では多かった。アメリカ人が大切にすることの「率直さ」が、イギリス人の目には「粗野」と映る。古い国と若い国の違いなのかもしれない。

スマイルの背後に

イギリスに来て勝手がわからなかったら、「バードン」「サンキュー」を乱発していればよいという人がいた。「バードン」とは、「おや、失礼」といった程度のごあいさつだ。コートにかすかにさわっても「バードン」、足をふんづけても「バードン」、相手の英語がわからなくても「バードン」だ。場合によっては「ボヤボヤするな」「さっさと歩け」と訳した方が正確なときもある。それに「サンキュー」という英語も、概してありがた味のうすいものだ。面倒くさいのか「キュー」「キュー」ですませる人もいる。

絶えず「バードン」「サンキュー」をかわし合っている人間関係は、はた目には、まことに気持ちよく、秩序立ってみえる。しかし、どうもそうばかりとはいえないこともあるようだ。つまり、バードン、サンキューを盛んにやっているのは、人間関係の中にたいへん冷酷で、合理的な個人主義があるからではないか。われわれ日本人の経験にてらしても、「おれ」「お前」と無遠慮な言葉を投げ合い、たまには喧嘩もするというのは、たいへん温かい間柄なのだ。喧嘩さえできるほど、おたがいに安心し、許し合っている仲がそこにある。逆に西洋社会では、おたがいのル

ール、エチケット、言葉づかいまで事こまかに決めておかないと、闘争的なエゴがむき出しになつて、社会が成り立ちにくい事情があるのではないかと思う。

西洋人がもつていて、日本人に少ない表情の特徴に笑顔がある。廊下やエレベーターで、見知らぬ人と視線が合ったとき、ニコリと顔をほころばせる。あれは日本人にはまねできない、みごとなスマイルだ。われわれが笑うと、ニコリとならずにニヤリとなるからだ。しかしそれ以上にまねられないのは、あのニコリが元の顔に戻るときの「変わり顔の早さ」だろう。表情いっぱいスマイルが、一瞬ののち横を向いたときは、もはや何事もなかったような素知らぬ表情、つまり生存競争に立ち向かう顔にかえっている。そのすばやい断絶ぶりを垣間見るときほど、ヨーロッパの冷酷無残さを感じさせることはない。あのスマイルも、実はパードン、サンキューと同じものなのである。

「詫びる」ことの意味

パードン、パードンは毎日、耳にタコができるほど聞かされるが、本気に詫びられたことがほとんどないのは、私だけの経験ではないだろう。外人は簡単には詫びない。おそらく日本人が「申し訳ありません」と頭を下げるほど、気軽にいかないのかもしれない。

よく出される例だが、欧米で自動車事故を起こしたら、決して「アイ・アム・ソリー」というな、その一言で「全額弁償」を認めることになるという。法律上、本当にそうなのかどうか確か

めてみたわけではないが、そんなときの日本人の気持ちからすれば、「責任はどうあれ、このような結果を招いたことはおたがいに残念なことです」といいたいわけだ。ところが西洋人の論理からすれば「天然現象ではあるまいし、事故が降ってわいたわけではない。どちらかに過失があったから起こったので、アイ・アム・ソリーかユー・アー・ソリーのどちらかしかない」ということになる。

だから交通事故でドライバーが「詫びる」のは、弁償するということであり、「詫びる」というのは、まことに重大な人格的な表現で、それだけの覚悟がある。一応「申し訳ない」と詫びておいて「そこをなんとか……」というのは、きわめて微妙な日本的感情で、他国には通じにくい。あるイギリス人と田中訪中の話をしていたとき「田中首相は中国の国土を荒廃させ、多くの人命を殺傷したことで、中国に公式に謝罪した」と説明したら、相手から「なぜ詫びるのか」と反問された。その人が疑問をもったのは「日本がああ戦争を悪かったと考え、詫びたいというのは立派なことだが、戦争をした相手は中国だけではない。では、なぜ他の国民には詫びないでよいと思ったのか。訪欧された天皇も、戦争のことは一言もふれなかったではないか」という点だった。

このあと話題は他のことに移ってしまったが、彼の質問にはいろいろな答え方があったかもしれない。

① 日中は特殊な、歴史関係にある。

② 中国民衆にかけた迷惑は、他国と比べものにならない。

③ 当時の中国は日本にとっての脅威ではなく、完全な被害者であり、帝国主義的列強と事情が違っていた。

④ 台湾と講和を結んで、中国とは国交のないまま放置してきた。

だが、こうした答えを準備しても、相手がはたして納得したかどうかは疑わしい。

第一項については「特殊な関係国にだけ詫びるべきなのか」。第二項には「被害の多少によるのか」。第三項には「中国との戦争以外は、やむを得ない戦争だったと主張するのか」。第四項には「すでに南北朝鮮、台湾、東南アジア、フィリピンの人々には詫びているのか」——と反問するに違いない。

この人は、日本が中国に謝罪することに反対しているわけではなかった。逆に、それは立派な行為だと思っていた。ただ、そう思うために、いくつかの疑問が残っていたのだろう。

第一に、日本人は「謝罪」は言葉だけですむと思っているのだろうか。これは、そんなに軽い言葉ではない。日本人は具体的にどのような謝罪行為を準備しているのか。

第二に、もし「謝罪」が本当のものなら、歴史や地理や人種や政治関係で相手を区別して、Aに詫びて、Bには詫びないという使い分けができるはずはない、といったかったのだと思う。

現にわれわれは、朝鮮の人々に対し何も詫びていない。その他の国の人々には詫びたのか、詫びなかったのか、だれも考えもしないし、気にもとめない。「中国への謝罪」でわれわれがいさ

さかの良心のなぐさめを得ているとき、外国では「バードン、バードンで、日本はまた輸出を伸ばすんだな」というささやきが聞こえる。日本から送られてくる新聞、雑誌には「謝罪は言葉でなく行為だ」と書いてある。だが、それもまた「言葉」となって氾濫し、消費され、廃棄されてしまいそうな日本の社会だ。

ロンドンからみる日本は、万事がたちまち生まれて、たちまち消えていくので、何をどこまで信じてよいのか途方にくれることがある。

(一九七二・十一・十七)

ばーそなりてい

ヨーロッパの人と話していて驚くことは、同じヨーロッパ人同士なのに、他国民に対する好ききらいがたいへん激しいことだ。

他国民についての批評が始まると「彼らは馬鹿だ」「ずるい」とか、あるいは「すばらしい」「魅力的だ」とか、まことに独断と偏見にみちみちた感想をズバズバいつてのけるのは、イギリス人に限らない。西欧人全体がそうだと思う。他国民を侮蔑する英語にも事欠かない。イギリス人がフランス人を軽蔑して「カエル」と呼ぶのは、カエルの足をたべる下品な人たちということからきているのだと説明してくれた人がいたが、スペイン人、イタリア人、ドイツ人——とそれ